

原著論文

日本語版 Revised Death Anxiety Scale の作成

中京大学心理学部 川島 大輔

Development of the Japanese Version of the Revised Death Anxiety Scale

KAWASHIMA, Daisuke (School of Psychology, Chukyo University)

This study aimed to develop a Japanese version of the Revised Death Anxiety Scale (RDAS-J) and investigate its psychometric properties. Study 1 involved a factor analysis, revealing that the RDAS-J included four components: Non-being, Pain, Body, and Afterlife. A significant correlation between the Death Anxiety Scale (DAS) and the RDAS-J was confirmed, except for the Body subscale. Study 2 examined the relationships between the RDAS-J and the scale of Attitudes Toward Death, and Religious Belief. The validity of the scale was also reconfirmed by the use of confirmatory factor analysis. Overall, the current results indicated that the RDAS-J has acceptable validity and reliability, but further research should be conducted to explore other related variables and improve the psychometric properties of the scale.

Key words: death anxiety, RDAS, validation

問題と目的

現代の日本社会では死に関連した様々な問題が生じている。例えば、末期癌や苦痛のコントロールといった死と密接に結びついた終末期医療の問題、脳死や臓器提供に関わる倫理的問題、そして自殺の問題などである。こうした社会的背景の中で、これまで死に関する様々な心理学的研究がなされてきたが (e.g., 川島・近藤, 2016), 死に対する不安や恐怖はその中核的なテーマの一つであった (Tomer, 1992)。

死の不安についての本格的な研究は、死の不安尺度を作成することから始められたといえ、代表的な尺度としては Death Anxiety Scale (DAS: Templer, 1970) が挙げられる。しかし徐々に、死の怖れを多次的に把握する必要性が叫ばれるようになり、Collet-Lester Fear of Death Scale (CLFDS: Collett & Lester, 1969), Revised Death Anxiety Scale (RDAS: Thorson & Powell, 1992), Hoelter Multidimensional Fear of Death Scale (MDFODS: Hoelter, 1979; Neimeyer & Moore, 1994) などの尺度が開発されている。しかしその後、死を受容する側面への関心の移行により、死の不安は死への態度 (attitudes toward death) を構成する要素として扱われるようになった。そして死の不安を主題に掲げること、そしてそれを多面的に捉えることへの

研究者の関心は以前よりも薄らいでしまった。しかし歴史的経緯から見ても、死の不安とは単一項目によってあらわされるものではなく、多様な側面が複雑に絡み合った複合体として本来捉えるべきである (Neimeyer & Van Brunt, 1995; Neimeyer, Moser & Wittkowski, 2003)。また死の不安の高さは様々な精神病理と密接に関連するものであり (Iverach, Menzies, & Menzies, 2014), 極度の不安は臨床的なケアの対象でもある (Neimeyer & Werth, 2005) ことからすれば、死の不安を直接検討する研究の必要性は大きい。

日本国内においては、概して死への態度や死生観といったより幅広い構成概念を測定する尺度の翻訳や開発 (e.g., 平井・坂口・安部・森川・柏木, 2000; 金児, 1994; 河合・下仲・中里, 1996; 隈部, 2006; 田中・齊藤, 2016; 丹下, 1999) と、それらを用いた研究がその大半を占めており、死の不安の多面的側面を丁寧に検討したものは多くない (古賀・川島・近藤, 2018)。また死の不安を多面的に測定するために、海外で作成された尺度の翻訳 (日本語版 MDFODS: 得丸・小林・平・松岡, 2006; 日本語版 CLFDS: 安川, 2008) や、独自の死の不安尺度 (改訂版死の不安尺度 Personal Death Anxiety Questionnaire Revised: PDAQ-R: 松田, 2012) の開発が試みられてきたが、その理論的背景や妥当性の検討が不十分であったり、翻訳版については現版

との内容的等価性が確認されていなかったりするなど問題点も少なくない²。

そこで本研究では、米国において開発された、死の不安を多面的に把握しうる Revised Death Anxiety Scale (RDAS: Thorson & Powell, 1992) の日本語版を新たに作成する。RDAS を採用した理由としては、非存在 (non-being, nonexistence) への恐れという実存的問題を死の不安の中核に位置付けた上で、実存的かつ発達的な観点からの理論的検討を行っている (Thorson & Powell, 1988; Tomer, Eliason, & Smith, 2000) ことが挙げられる。尺度開発の隆盛の一方で、理論的検討の欠如が声高に指摘されてきた (e.g., Kastenbaum, 2001; Neimeyer, 1994; Tomer, 1992) ことに鑑みれば、この点における当該尺度の優位性は大きい。また海外で広く使用されており国際比較が可能なことも挙げられる。以下、RDAS の具体的内容について記述する。

Revised Death Anxiety Scale

Revised Death Anxiety Scale (RDAS) は 25 項目からなる自己記入式調査尺度である。この尺度は、死の不安に関する研究においてもっとも頻りに用いられている DAS (Templer, 1970) とその後の尺度に関わる議論を土台として、他の尺度からの項目の追加、複数回にわたる構成の改訂、リッカート方式への変更などを経て作成された尺度である (Thorson & Powell, 1992)。また既述の通り、この尺度は死の不安の中核に据えられるものを非存在への恐れとした上で、大きく 2 つの理論的観点によって検討されている (Thorson & Powell, 1988)。第一は、Becker (1973 今訳 1989) が高らかに宣言した、死への恐れこそが人間活動の推進力であるという主張、換言すれば、死という宿命を避け、死すべき運命を否認し、さらには克服することが、人間存在にとっての主要な活動であるとの主張である。また非存在への恐れについての議論は不安と実存を巡る哲学者、例えばキルケゴールやハイデガーの議論にまで遡ることができる (Tomer et al., 2000)。第二は、死への直面が人生への回顧を促すこと、またその人生の再構成の結果、死の不安が軽減するという Butler (1963) のライフレビュー (Life Review) に基づく観点である (Thorson & Powell, 1988, 1990, 1992)。これは、人は高齢期において人生を回顧し、統合することで死の不安に苛まれるこ

とがなくなるとの Erikson の理論 (Erikson, Erikson & Kivnick, 1986 朝長・朝長訳 1990) とも一致する。このように当該尺度は実存的観点ならびに発達の観点に基づく理論に依拠して構成された希少な尺度の一つであるといえる。

RDAS の因子構造について、Thorson & Powell (1992) は死の不安の高い集団において「非存在」「苦痛への恐怖や無力感」「死後世界や腐敗」「統制感や苦痛、死後処置への懸念」、また死の不安の低い集団では「不確実性」「死後世界への懸念」「無力感と身体統合」「苦痛への恐怖」からなる 4 因子構造を報告している。Tomer et al (2000) はこれらを総括した上で、「非存在」「苦痛」「後悔」「遺体」の 4 つの因子として再検討している。他方で、高齢者の死の不安は 4 因子構造である一方で、青年の死の不安は 3 因子構造 (非存在と後悔、苦痛、遺体) であるとの指摘もなされている。なお RDAS は多次元性を想定して作成されたものであるが、合計得点からも死の不安の程度を測定することができる。先行研究では内的一貫性が .80 ~ .90 (Ens & Bond, 2005; Nienaber & Goedereis, 2015; Russac, Gatliff, Reece, & Spottswood, 2007; Tang, Wu, & Yan, 2002; Thorson & Powell, 1990, 1992) と報告されている。構成概念妥当性に関しては、男性よりも女性の方が死の不安が高く、また年齢に応じて死の不安が低減すること (Thorson & Powell, 1988, 1990, 2000; Tomer et al., 2000)、そして宗教性の高低を弁別できること (Thorson & Powell, 1990) が報告されている。ただし女性は中年期に再び死の不安が高まるなど、年齢と死の不安が非線型の関係にあることも指摘されている (Russac et al., 2007)。加えて、男女差については、差はあるものの、それほど顕著なものではないとの指摘もある (Thorson & Powell, 1992; 2000)。

研究の目的

本研究では、まず日本語版 RDAS を作成し、その内容的妥当性および因子構造の確認と信頼性を検討する。また既存の死の不安尺度、性別、死と人生の思索頻度との関連についても検討する (研究 1)。次に日本語版 RDAS と死への態度尺度および宗教性尺度との相関分析を通じて、同尺度の構成概念妥当性について検討する。合わせて確認的因子分析を行うことで、モデルの適合度を確認する。またデモグラフィック変数との関連についても検討する (研

究 2)。

研究 1

目的

日本語版 RDAS (以下, RDAS-J) を作成し, その内容的妥当性, 因子構造の確認, 併存的妥当性, 構成概念妥当性および信頼性を検討する。

方法

翻訳手続き 原著者の許可を得た上で筆者が, 原版の内容をできる限り忠実に反映すると同時に, 自然な日本語になるように心がけ日本語に翻訳した。続いて原版の英文を知らないバイリンガルが, 全項目について逆翻訳を行った。そして逆翻訳された内容について原著者の確認を求めた。その結果, 原版の内容と逆翻訳された内容が, 内容的に等価であることが, 原著者によって確認された。

調査方法と調査対象者 2008年6月~10月の期間で, 関東圏内の4年制大学において質問紙調査を実施した。質問紙は講義中に配布し, その場で回収した。回答した193名分のうち, RDAS-Jの回答に不備のない180名(男性78名, 女性101名, 不明1名, 平均年齢19.8歳)を分析対象とした。回答に先だち, 質問紙が“死”を主題にしていること, 調査への参加は自由であり回答拒否ができること, 無記名回答により個人の匿名性が守られることを明示した。また回答後にはディブリーフィングをかねて, 30分間のデス・エデュケーションを行った。具体的には, 死は身近な問題であり, また死を見つめることで人生をより良く見つめることができることについての講義である。

質問紙 RDAS-J (25項目) は原版と同様, 5件法 (0= そう思わない, 4= そう思う) でたずねた。また併存的妥当性を検討するため, DAS (Templer, 1970) についての回答も求めた。DAS を妥当性検討のために用いたのは, この尺度が国内外での尺度の妥当性の検討に際して, もっとも頻繁に用いられており (e.g., 河合他, 1996; 金児, 1994; Neimeyer, 1997-1998; Neimeyer et al., 2003), かつ RDAS は DAS をもとに作成された尺度だからである (Thorson & Powell, 1992)。なお DAS の翻訳は複数の研究者によってなされているが (河合他, 1996; 金児, 1994; 岡村, 1983), 本研究では河合他 (1996) の翻訳したものをを用いた (ただし

DAS に回答したのは50名のみである (男性22名, 女性28名, 平均年齢20.92歳, $SD = 2.47$)。DAS は15項目からなる質問によって構成されており, 「はい」「いいえ」の2件法で回答を求め, その合計値を得点とした。さらに死について考えること (死の思索頻度) について, 直近の頻度を5件法 (0 = 全くない, 4 = いつもある) でたずねた。その他, 基本的属性として年齢, 性別もたずねた。

分析方法³ RDAS-J の内容的妥当性について吟味した。続いて, 探索的因子分析を行い, 因子構造の確認と内的一貫性による信頼性を検討した。また併存的妥当性ならびに構成概念妥当性を検討するため, 他変数との関係について, t 検定および相関分析を実施した。なお後述するように RDAS の下位因子間に相関関係が認められたため, 下位因子と属性変数との相関分析では, 他の下位尺度得点を制御した偏相関係数 (統計値として r_p で示す) を算出した。RDAS-J の合計得点と DAS との関係についてはピアソンの相関係数を算出した。

結果

内容的妥当性の検討 全25項目の内容的妥当性について吟味した結果, 質問項目には埋葬を想定した項目が複数存在した。日本では昭和30年代にはまだ土葬も各地で頻繁になされており, 現在でも土葬された墓が残っている。しかし土地不足の問題や, 土葬を尊ぶ儒教的考え方が薄れ火葬を良しとする仏教的価値観に取って代わったことなどから, 現在ではほぼすべての葬送形態が火葬である (厚生統計協会, 2007)。しかしこれは土葬に対する不安が解消されたことを意味してはいない。実際, 数多くの犠牲者を出した東日本大震災時には, 焼却炉の損壊や数不足のため遺体の火葬が追いつかず, 期せずして多くの遺体が埋葬されたが, その際に多くの遺族が土葬に対して強い抵抗感を抱いたことが各種の新聞報道でも散見された。つまり, 土葬による葬送が見られなくなったために, かえってそのことに対する不安が顕著になってきているともいえる。埋葬に関する項目については, 日本とキリスト教の影響が顕著な欧米との葬送形式をめぐる社会文化的背景の差異に留意しなければならないが, 日本人の死生観を測定する上で重要であると判断した。同時に, 国際比較調査の実施や, 今後同尺度を用いた研究を中年や高齢者等の他世代にも拡張していくことを考えれば, 土葬に関する項目は逆に死の不安の世代差ない

Table1 RDAS-Jの因子構造(最尤法, プロマックス回転)

	1	2	3	4	共通性
<非存在> = .86					
22) 死んだら完全な孤独になることが怖い。注 ¹	.89	.02	-.05	-.16	.56
14) 死んだらもう何も感じるができなくなると考えると, 気が動転してしまう。	.79	-.07	-.07	.17	.66
7) 死んだらまったく動けなくなると思うと, 落ち着かない。	.70	-.01	.07	.15	.67
17) いつか無力な存在になることを心配してはいない。注 ²	.66	-.07	.03	-.03	.41
19) 死んでしまったら, 私は多くのものを失ってしまうだろうと感じると, 動揺してしまう。	.62	.02	-.05	.09	.43
3) 死んでしまったら, もう二度と意見を変えることができないのが恐ろしい。	.54	.11	.08	-.05	.37
<苦痛> = .77					
15) 死んでいくときに伴う痛みが怖い。	-.08	.92	-.07	.00	.58
1) 私は苦しんで死ぬのが怖い。	-.22	.69	-.03	.22	.50
23) 癌になることをとくに恐れてはいない。	.20	.57	.03	-.10	.40
8) 手術が必要になるのではないかと考えると恐ろしい。	.21	.52	.14	-.19	.43
<遺体> = .72					
4) 埋葬された後, 遺体に起こることについてはまったく不安を感じない。	-.11	-.07	.88	.04	.45
11) 死んだら, 棺の中に閉じ込められるということをもまったく気にしない。	.02	.08	.64	.04	.41
25) 私の死後, この肉体にいったい何が起こるのかについては, 心配していない。	.19	.02	.57	.04	.47
<死後世界> = .72					
9) 死後の世界で自分がどうなるかと, 私はとても悩んでいる。	.18	.05	-.04	.66	.55
2) あの世がどんなものかわからないことが心配だ。	.18	.03	.01	.62	.51
13) 死後の世界があるかないかについてはまったく関心がない。	-.12	-.04	.10	.58	.30
因子間相関	1	2	3	4	
1		.297**	.497**	.575**	
2			.259**	.274**	
3				.383**	

注¹ 項目番号は原版(25項目)の番号

注² 逆転項目は4, 11, 13, 17, 23, 25

** $p < .01$

し文化差を測る上で重要であると考えられる。以上より, 全項目を因子分析に採用した。

RDAS-Jの因子構造と信頼性 RDAS-Jの25項目に対して探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行ったところ, 固有値の減衰状況およびスクリー基準より4因子構造が確認された。続いて因子負荷量が.40を満たさない項目, および複数の因子に負荷のある項目群を除外し, 最終的に第1因子が6項目, 第2因子が4項目, 第3因子が3項目, 第4因子が3項目となった。回転前の4因子で16項目の全分散を説明する割合は64.49%と十分に高い値を示した。第1因子は死によって自らの存在が失われることによる孤独や恐怖, 不安である(非存在)。第2因子は死に際の苦痛に対する不安である(苦痛)。第3因子は遺体の扱いや変化に対する不安である(遺体)。そして第4因子は死後の世界に対する不安である(死後世界)。各下位尺度の係数を算出したところ, $r = .72 \sim .83$ と一定の内的一貫性が確認されたことから, 各因子に属する項目の合計得点を項目数で除したものを, 各因子得点とした。すなわち非存在得点 ($M = 1.28, SD = .99$), 苦痛得点 ($M = 2.78, SD = .96$), 遺体得点 ($M = 1.21, SD =$

1.05), 死後世界得点 ($M = 1.63, SD = 1.07$) である。また16項目の係数を算出したところ $r = .87$ と十分な値が得られたことから, 16項目の合計得点をRDAS-J得点 ($M = 27.37, SD = 12.09$) とした。下位尺度間の相関係数を算出したところ, $r = .27 \sim .58$ とすべての下位尺度間に有意な正の相関が見られた。

他の変数との関連 まずDASの係数を算出したところ.67と一定の内的一貫性が確認できたため, 15項目の合計得点をDAS得点(平均9.52, $SD = 2.69$)とした。RDAS-Jの下位尺度得点および合計得点とDASの相関係数を算出したところ, 「遺体」を除く3つの下位因子, すなわち「非存在」($r_p = .32, p < .05$), 「苦痛」($r_p = .53, p < .001$), 「死後世界」($r_p = .35, p < .05$), そしてRDAS-J得点 ($r = .45, p < .01$)とのあいだに, 有意な正の相関が見られた。

またRDAS-J得点と4つの下位尺度について男女差の検定を行ったところ, 先行研究とは異なり本研究では有意な差は確認できなかった ($ps > .05$)。年齢との相関係数を算出した結果, 「死後世界」($r_p = -.20, p < .01$)との有意な負の相関関係が認めら

れた。さらに死の思索頻度と、RDAS-J 得点と 4 つの下位尺度との相関係数を算出した結果、「非存在」($r_p = .20, p < .01$)と「死後世界」($r_p = .17, p < .05$), RDAS-J 得点 ($r = .15, p < .05$) において有意な正の相関を示した。つまり死を思索するほど、死の不安が高まるといえる。

考察

因子分析の結果、見出された 4 因子構造、すなわち「非存在」「苦痛」「遺体」「死後世界」は、若干項目の変動が見られるものの、先行研究 (Thorson & Powell, 1992) での報告とほぼ一致する。また内的一貫性について、先行研究では下位尺度の信頼係数は示されていないが、本研究の 4 つの下位尺度および 16 項目の合計得点において許容できる値を示した。ここから RDAS-J は明確な因子構造と一定の内的一貫性を保持しているといえる。また「遺体」を除く下位因子および RDAS-J 得点と DAS とのあいだに有意な正の相関関係が認められたことから、その併存的妥当性と弁別的妥当性が確認された。他方で、男女差は本研究では確認されなかった。

研究 2

目的

RDAS-J と死への態度尺度、宗教性尺度との相関分析を通じて、同尺度の構成概念妥当性について検討する。さらに研究 1 のサンプルと統合した上で、因子構造の安定性について確認的因子分析を用いて検証する。

方法

調査方法と対象者 2009 年 10 月に、関東圏内の 4 年制大学において質問紙調査を実施した。質問紙は講義中に配布し、その場で回収した。回答した 201 名分のうち、RDAS-J の回答に不備のない 192 名を分析対象とした (男性 76 名、女性 116 名、平均年齢 20.32 歳 ($SD = 1.25$)). 回答に先だって、質問紙が「死」を主題にしていること、調査への参加は自由であり回答拒否ができること、回答を行わなくとも成績には影響しないこと、無記名回答により個人の匿名性が守られること、得られたデータの一部を授業の教材として使用することを明示した。また回答後にはディブリーフィングをかねて、死と生との関係について約 15 分程度解説を行った。あわせ

て同じ授業の別の講義回 (講義主題は「若者の死生観」) に得られたデータの一部を紹介しつつ、90 分のデス・エデュケーションを実施した。

質問紙 RDAS-J は研究 1 において確認した 16 項目によるものを採用した。回答者に対しては各項目について「そう思わない = 0」から「そう思う = 4」の 5 件法で回答を求めた。「非存在」「苦痛」「遺体」「死後世界」の 4 因子からなる。死への態度尺度 (丹下, 1999) は、「死に対する恐怖」「生を全うさせる意志」「人生に対して死が持つ意味」「死の軽視」「死後の生活の存在への信念」「身体と精神の死」の 6 つの因子によって構成されている⁴。なお質問項目は丹下 (2004) によるものを用い、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」の 5 段階で評定させた。宗教性尺度 (金児, 1997) は、「向宗教性」「靈魂観念」「加護観念」の 3 つの因子によって構成されている。項目内容は大学生を対象にした調査で使用されたものを用い、4 件法 (とても反対 = 1, とても賛成 = 4) で評価させた。また死別経験 (経験あり = 144 名、なし = 44 名、答えたくない = 4 名) と重篤な病いの経験 (経験あり = 38 名、なし = 150 名、答えたくない = 4 名) についても、その有無をたずねた。

分析方法 まず RDAS-J の下位尺度間には相関関係が認められることから、RDAS-J の他の下位因子を制御して、死への態度尺度と宗教観尺度との偏相関分析を行った。また性別、年齢、死別経験、そして重篤な病いの経験と死の不安との関連を検討するため、「答えたくない」と回答したものを除いた上で、 t 検定あるいは相関分析を行った。さらに RDAS の因子構造を確認するため、研究 1 および 2 のサンプルを統合した 372 名のデータを用いて確認的因子分析を行った。因子構造の適合度指標には、GFI (Goodness of Fit Index), CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を用いた。GFI と CFI について 1 に近づくほど、また RMSEA は 0 に近づくほど、モデルの適合が良いとされる (豊田, 1998; 山本・小野寺, 1999)。

結果

RDAS-J と死への態度尺度、宗教性の関連 RDAS-J の各下位尺度および合計得点と死への態度の下位尺度のうち、「死に対する恐怖」との偏相関係数を算出したところ、「遺体」を除く、「非存在」

Table 2 下位尺度間の記述統計量と偏相関係数

		RDAS-J			
		非存在	苦痛	遺体	死後世界
		.83	.60	.71	.64
<i>M (SD)</i>		1.35 (.90)	2.80 (.84)	1.16 (.96)	1.59 (.99)
死への態度					
死に対する恐怖	.82 3.14 (.80)	.51***	.36***	.14	.23**
生を全うさせる意思	.78 3.44 (.48)	.14	.11	.03	-.10
人生に対して死が持つ意味	.57 3.87 (.63)	-.03	.01	-.13	.12
死の軽視	.66 2.79 (.74)	-.12	-.05	-.15*	.11
死後の生活の存在への信念	.79 3.00 (.97)	.05	.15*	.09	.28***
身体と精神の死	.63 4.20 (.74)	-.12	-.03	-.04	-.04
宗教性					
向宗教性	.87 2.07 (.46)	.02	-.04	-.05	.17*
靈魂觀念	.79 2.52 (.58)	-.07	.22**	-.03	.27***
加護觀念	.81 2.70 (.50)	.00	.01	-.09	.08

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

($r_p = .51, p < .001$), 「苦痛」($r_p = .36, p < .001$), 「死後世界」($r_p = .23, p < .01$), RDAS 得点 ($r = .82, p < .001$) で有意な正の相関が確認された。また死への態度の他の下位尺度と RDAS-J の下位尺度間に、いくつかの有意な値が得られた。「苦痛」は「死後の生活の存在への信念」($r_p = .15, p < .05$) と正の相関関係が確認された。「遺体」は「死の軽視」($r_p = -.15, p < .05$) と負の相関関係が確認された。「死後世界」は「死後の生活の存在への信念」($r_p = .28, p < .01$) と正の相関関係が認められた。RDAS 得点については、生を全うさせる意志 ($r = .21, p < .01$), 死の軽視 ($r = -.19, p < .05$), 死後の生活の存在への信念 ($r = .34, p < .001$), 身体と精神の死 ($r = -.25, p < .01$) との相関関係が認められた。

次に、RDAS-J の下位尺度と宗教性の下位尺度間の偏相関係数を算出したところ、「苦痛」と「靈魂觀念」の間に正の相関が確認された ($r_p = .22, p < .01$)。また「死後世界」と「向宗教性」($r_p = .17, p < .05$), 「靈魂觀念」($r_p = .27, p < .01$) との間に正の相関が見られた。RDAS-J 得点については向宗教性 ($r = .17, p < .05$), 靈魂觀念 ($r = .31, p < .001$) との相関関係が認められた。

デモグラフィック変数との関連 苦痛においてのみ性差が認められ ($t(190) = -3.26, p < .01$), 女性 ($M = 11.67, SD = 2.92$) が男性 ($M = 10.22, SD = 3.25$) よりも有意に得点が高かった。年齢, 近い人との死別経験の有無, 重篤な病いの経験の有無については、いずれも有意な関係は認められなかった ($ps > .05$)。

因子構造の適合度 4 つの下位因子と上位因子が

らなる二次因子モデルを想定し、RDAS-J について確認的因子分析を行った結果、GFI = .94, CFI = .94, RMSEA = .06 であった。

考察

RDAS-J の「遺体」を除く下位尺度および RDAS-J 合計得点と、死への態度尺度の「死に対する恐怖」との正の相関関係が認められた。同時に、「非存在」が死に対する恐怖と中程度の相関係数を示す一方で、他の下位尺度とは低度の相関係数に止まっていた。これらの結果は RDAS-J の収束的妥当性と弁別的妥当性ならびに、死の恐怖を多面的に測定しうる構成概念妥当性を示しているといえる。

RDAS-J と宗教性との関係については、宗教に対する親和性が高いほど、死後の世界に対する不安が高まるという結果となった。欧米では宗教性の高い人は死の不安が低いと報告されており (Thorson & Powell, 1990), キリスト教圏のみならず、イスラム圏でも同様の傾向 (Suhail & Akram, 2002) が報告されている。他方で日本においては、そもそも宗教性自体が異なっており、日本人の宗教性を構成する、向宗教性, 加護觀念, 応報觀念の3つのうち、民俗宗教性と言い換えられる後者二つの宗教性の特異性から、外発 - 内発の二分法ではとらえきれないことが指摘されている (金児, 1997)。また日本人学生を対象とした場合、どのような宗教性であっても死の不安を高める可能性も示唆されている (河野, 2000; 松田, 2012)。本研究で認められた、向宗教性も死の不安を高めるという結果は、日本人の特質の表れとも考えられる。

この他、研究1の結果とは異なり、苦痛への恐怖についての男女差が確認された。また先行研究で指摘されていた死別経験や病いの経験との関わり (Neimeyer & Van Brunt, 1995) については、本研究では認められなかった。さらに確認的因子分析の結果から RDAS-J の因子構造の適合度は良好と判断された。

総合考察

まとめ

本研究は、日本語版 RDS を作成し、その妥当性と信頼性を確認することが目的であった。研究1において、逆翻訳の手続きによる内容的等価性、内容的妥当性、探索的因子分析による因子構造、DAS との併存的妥当性、そして内的一貫性による信頼性を確認した。RDAS の因子構造については「非存在」「苦痛」「遺体」「死後世界」の4因子からなることが確認された。これは先行研究の報告 (Thorson & Powell, 1992) とほぼ一致するものである。加えて、研究2の確認的因子分析により日本語版 RDAS の因子構造の安定性が確認された。

また研究1において「遺体」をのぞく下位因子および RDAS-J 合計得点と DAS との有意な正の相関関係が確認されたことから、併存的妥当性および弁別的妥当性が確認された。さらに研究2において「遺体」をのぞく RDAS-J の下位尺度および RDAS-J 合計得点と、死への態度尺度の「死に対する恐怖」との正の相関関係が認められたが、「非存在」が死に対する恐怖と中程度の相関係数を示す一方で、「苦痛」「死後世界」では低度の値であった。このことは、死の不安を多面的に測定しうる RDAS-J の構成概念妥当性を示しているといえる。RDAS-J と宗教性との関係については、宗教に対する親和性が高いほど、死後の世界に対する不安が高まるという結果となった。欧米では宗教性の高い人は死の不安が低いと報告されている (Thorson & Powell, 1990) が、本研究ではそれとは反対の結果となった。この理由としては、日本人の宗教性の特徴、すなわちユダヤ・キリストの一神教とは異なり、神道や仏教などが複雑に入り混じった形で宗教性が醸成されてきた歴史的な文脈、そして無宗教を標榜する一方で年中行事や法要などの宗教行事には積極的に参加する現代日本人の特徴 (松島・川島・西脇, 2016) が現れた可能性が考えられる (金児, 1997,

河野, 2000)。ただし欧米でも、宗教性の高い群と低い群では、不安や恐怖を感じる死の側面が異なる可能性や (Neimeyer & Van Brunt, 1995)、そもそも死の不安と宗教性には逆 U 字の曲線的関係性があることも指摘されている (Wen, 2012)。いずれにせよ今後のさらなる研究蓄積が必要であろう。

先行研究 (Ens & Bond, 2005; Russac et al., 2007; Tang et al., 2002; Thorson & Powell, 1988; Tomer et al., 2000) で確認されていた男女差は、研究1では確認されず、研究2においてのみ確認された。先行研究でも男女差はそれほど大きくないことが指摘されているが (Thorson & Powell, 1988; 1992)、今後の調査において再度検討することが必要である。

結論と今後の課題

本研究を通じて、RDAS-J の因子構造の安定性、内容的妥当性、逆翻訳の手続きによる内容的等価性、併存的妥当性、構成概念妥当性および内的一貫性による信頼性が確認された⁵。しかしながら、すでに触れてきた以外にも次の課題が残されている。

まず再検査法による信頼性や、青年期以降の発達的变化 (Thorson & Powell, 1988, 1990; Tomer et al., 2000; Russac et al., 2007) については不明瞭なままである。また既述の通り、因子構造は報告によって変動が認められており、特に Tomel et al (2000) の報告と本研究の因子構造を比較すると、「非存在」が第一因子であり、また「苦痛」と「遺体」は項目が完全に一致している一方で、本研究でのみ「死後世界」が独立した因子として抽出されている。本研究では2つの研究を通して因子構造の安定性が確認されたが、青年期以外の世代においても同様の構造が確認されるかどうかは引き続き検討が必要であろう。加えて、先行研究において関連が指摘されている諸変数、例えば自己効力感 (Tang et al., 2002) や薬物使用などの危険行為 (Cotton, 1996)、精神的健康 (Thorson & Powell, 2000) などのより臨床的・実践的意義のある変数との関係性についても、今後のさらなる研究が期待される。

付記

本研究の一部は日本心理学会第73回大会において発表された。

注

- 1 一般的には特定の対象に対する怖れを恐怖 (fear), はっきりした対象のない漠然とした怖れを不安 (anxiety) として, 区分される。本研究では開発尺度にあわせて不安という用語を中心的に用いる。ただし, 実際の研究ではこれらが明確に区別されることが稀であるため (Neimeyer & Van Brunt, 1995; Neimeyer et al., 2003), 尺度に直接言及しない場合には怖れという表現も適宜用いることとする。
 - 2 日本語版 CLFDS については逆翻訳の手続きがなされていないが, 原著者の確認については記載がない。
 - 3 本研究の分析には SPSS ver.22 および Amos ver.20 を使用した。
 - 4 向宗教性は宗教に対する肯定的あるいは否定的態度である。加護観念は風俗や年中行事としての宗教への親しみや緩やかな結びつき, 自然に対する敬虔な気持ちである。応報観念は願い事を叶えたり, 祟りや罰を与える人知を超えた存在に対する畏怖の念である。
 - 5 本研究では直接取り上げなかったが, 国際比較調査においては 25 項目版の RDAS 日本語版を使用することも可能である。25 項目の加算得点については, 高い内的一貫性 ($\alpha = .89$) が確認されている。ただし適合度に関しては, $GFI = .81$, $CFI = .76$, $RMSEA = .08$ であり, 本研究で作成された 16 項目版と比較するとやや劣る点には注意が必要である。また妥当性に関して, 年齢 ($r = -.15, p < .05$), 死の思索頻度 ($r = .16, p < .05$), DAS ($r = .50, p < .001$), 死に対する恐怖 ($r = .82, p < .001$), 生を全うさせる意志 ($r = .20, p < .01$), 死の軽視 ($r = -.21, p < .01$), 死後の生活の存在への信念 ($r = .41, p < .001$), 身体と精神の死 ($r = -.27, p < .001$), 向宗教性 ($r = .18, p < .05$), 靈魂観念 ($r = .37, p < .001$) との相関関係が認められている。項目内容の詳細等は著者に連絡されたい。
- 引用文献
- Becker, E. (1973). *The denial of death*. New York, NY, US: Free Press. (ベッカー, E. 今防人 (訳) (1989). *死の拒絶* 平凡社)
- Butler, R. N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes*, 26(1), 65-76.
- Collett, L. J., & Lester, D. (1969). The fear of death and the fear of dying. *Journal of Psychology*, 72(2), 179-181.
- Cotton, A. (1996). Is there a relationship between death anxiety and engagement in lethal behaviors among African-American students? *Omega: Journal of Death and Dying*, 34(3), 233-245.
- Ens, C., & Bond, J. B., Jr. (2005). Death anxiety and personal growth in adolescents experiencing the death of a grandparent. *Death Studies*, 29(2), 171-178.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. エリクソン, J. M. キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) (1990). *老年期——生き生きしたかわりあい——みすず書房*)
- 平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000). 死生観に関する研究——死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証——*死の臨床*, 23(1), 71-6.
- Hoelter, J. W. (1979). Multidimensional treatment of fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47(5), 996-999.
- Iverach, L., Menzies, R. G., & Menzies, R. E. (2014). Death anxiety and its role in psychopathology: reviewing the status of a transdiagnostic construct. *Clinical Psychology Review*, 34(7), 580-593.
- 金児曉嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), 46, 537-564.
- 金児曉嗣 (1997). 日本人の宗教性——オカゲとタタリの社会心理学——新曜社
- Kastenbaum, R. (2001). Thanatology. In G. L. Maddox (Ed. in chief), *The encyclopedia of aging: A comprehensive resource in gerontology and geriatrics*. 3rd Edition (pp. 1015-1017). New York: Springer.
- 河合千恵子・中仲順子・中里克治 (1996). 老年期における死に対する態度 *老年社会科学*, 17(2), 107-116.
- 川島大輔・近藤恵 (編) (2016). *はじめての死生心理学——現代社会において, 死とともに生きる——*新曜社
- 古賀佳樹・川島大輔・近藤恵 (2018). 国内における死生観尺度の現状と今後の展望 *日本発達心理学会第29回大会発表論文集*
- 河野由美 (2000). 大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究 *飯田女子短期大学紀要*, 17, 73-87.
- 厚生統計協会 (編) (2007). *墓地等 国民衛生の動向——厚生指標臨時増刊——* 54(9), 298.
- 隈部知更 (2006). 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究 *健康心理学研究*, 19(1), 10-24.
- 松田茶茶 (2012). 「死の不安」の心理学——青年期の特徴と課題——ナカニシヤ出版
- 松島公望・川島大輔・西脇良 (編著) (2016). *宗教を心理学する——データから見えてくる日本人の宗教性——* 誠信書房
- Neimeyer, R. A. (1994). Death attitudes in adult life: A closing coda. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application*. (pp. 263-277). Washington, DC: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A. (1997-1998). Special article: Death anxiety research: The state of the art. *Omega: Journal of Death and Dying*, 36(2), 97-120.
- Neimeyer, R. A., & Moore, M. K. (1994). Validity and reliability of the multidimensional fear of death scale. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and*

- application. (pp. 103-119). Washington, DC: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A., Moser, R. P., & Wittkowski, J. (2003). Assessing attitudes toward dying and death: Psychometric considerations. *Omega: Journal of Death and Dying*, 47(1), 45-76.
- Neimeyer, R. A., & Van Brunt, D. (1995). Death anxiety. In H. Wass & R. A. Neimeyer (Eds.), *Dying: Facing the facts*. 3rd Edition (pp. 49-88). Philadelphia, PA: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A., & Werth, J. L., Jr. (2005). The psychology of death. In M. L. Johnson (Ed.), *The Cambridge handbook of age and ageing* (pp. 387-393). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Nienaber, K., & Goedereis, E. (2015). Death anxiety and education: A comparison among undergraduate and graduate students. *Death Studies*, 39(8), 483-490.
- 岡村達也 (1983). 「死に対する態度」の研究 —— 青年と成人との比較 —— 東京大学教育学部紀要, 23, 331-343.
- Russac, R. J., Gatliff, C., Reece, M., & Spottswood, D. (2007). Death anxiety across the adult years: An examination of age and gender effects. *Death Studies*, 31(6), 549-561.
- Suhail, K., & Akram, S. (2002). Correlates of death anxiety in Pakistan. *Death Studies*, 26(1), 39-50.
- 田中美帆・齊藤誠一 (2016). 成人期の生と死に対する態度尺度の構成 カウンセリング研究, 49(3-4), 160-169.
- Tang, C. S., Wu, A. M., & Yan, E. C. (2002). Psychosocial correlates of death anxiety among Chinese college students. *Death Studies*, 26(6), 491-499.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70(4), 327-332.
- 丹下智香子 (2004). 宗教性と死に対する態度 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 51, 35-49.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *The Journal of General Psychology*, 82(2), 165-177.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1988). Elements of death anxiety and meanings of death. *Journal of Clinical Psychology*, 44(5), 691-701.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1990). Meanings of death and intrinsic religiosity. *Journal of Clinical Psychology*, 46(4), 379-391.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1992). A revised death anxiety scale. *Death Studies*, 16(6), 507-521.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. (2000). Death anxiety in younger and older adults. In A. Tomer (Ed.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp. 123-136). Philadelphia: Brunner-Routledge.
- 得丸定子・小林輝紀・平和章・松岡律 (2006). 日本の大学生における死と死後の不安 日本家政学会誌, 57(6), 411-419.
- Tomer, A. (1992). Death anxiety in adult life - theoretical perspectives. *Death Studies*, 16(6), 475-506.
- Tomer, A., Eliason, G., & Smith, J. (2000). The structure of the Revised Death Anxiety Scale in young and old adults. In A. Tomer (Ed.), *Death attitudes and the older adult: Theories, concepts, and applications* (pp. 109-122). Philadelphia: Brunner-Routledge.
- 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析 入門編 —— 構造方程式モデリング —— 朝倉書店
- Wen, Y. (2012). Religiosity and death anxiety of college students. *The Journal of Human Resource and Adult Learning*, 8(2), 98-106.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (編) (1999). Amos による共分散構造分析と解析事例 ナカニシヤ出版
- 安川敬子 (2008). 日本語版「Collet-Lester 死の恐怖尺度」の因子構造の分析 —— 看護師の死の対する恐怖レベルを把握する尺度の確定 —— 死の臨床, 31(1), 67-73.